

## 尾佐竹猛研究について

渡 辺 隆 喜

「駿台学」とは、駿河台に立地する明治大学に固有な、学問的伝統を表わす言葉である。明治大学一〇〇周年の歴史のなかで、いかにこの伝統が形成されてきたかの検証は、すでに前号の『明治大学史紀要』第八号で特集されている。大学の歴史の長い間で、明治大学の個性にかかわる独自の学問を、構築しようと試みた人は何人かはいるのである。しかし、これらの中で、最も駿台学にふさわしい研究をした人物は、尾佐竹猛ではないか、とわれわれは考えている。したがって本号の尾佐竹研究の特集は、前号の「駿台学」検証を継承した、その第二弾ともいえるべきものである。

尾佐竹は明治一三年八月、金沢藩下級士族尾佐竹保の長男に生れた。昭和二十二年、疎開先の福井から帰って中野で死亡するまでの六六年間、多彩な人生を送っている。この間、彼は明治二七年八月、ときの明治法律学校（現明治大学）に入学、同三年六月に優秀な成績で卒業、その後、福井、東京の地方裁判所判事を経、大正二年の東京控訴院判事、同一三年に大審院判事になった人物で、明治末期より始めた研究

で東京大学より法学博士号を取得、東京大学、九州大学、明治大学で教鞭をとっている。

明治大学では当初、法学部講師となり教授昇格後、昭和七年四月再生の文科専門部の創立に参画、発足当時の文科専門部長となり、今日の明治大学文学部の基礎をつくっている。

尾佐竹は学問的には憲政史、文化史、維新史を三本柱とする研究者であると、自分で述べている。今日の意味で云えば、それらはいずれも明治維新史の一分野であり、尾佐竹は明治維新史研究の生みの親といっても過言ではない。この維新史研究を中心に、多彩な彼の研究活動を明らかにしようとしたのが本特集である。尾佐竹研究をつうじて「駿台学」の本質に一層接近したいと思っている。